

# ガリチアの首都レンベルク

小 粥 良

## 序

本稿の目指すのは、まず、旧オーストリア・ハンガリー帝国の一部を成していたガリチア地方（現在はウクライナ西部）の中心的都市レンベルク（ウクライナ名リヴィウ）の置かれていたコロニアルな状況の特殊性を明らかにすること、第二に、そのような状況の中でこの都市に生きたウクライナの詩人イヴァン・フランコ（1856年－1916年）が、オーストリア帝国の主流文化としてのドイツ語およびドイツ文学と関わる際に取った戦略的姿勢の意義を考察するための端緒を得ることである。

## I. イヴァン・フランコの『ガリチアの創造物語』

ガリチアをめぐる小品や断章のアンソロジー『Europa erlesen. Galizien』<sup>1)</sup>の冒頭に、イヴァン・フランコがドイツ語で執筆し、1901年にウィーンの雑誌「ディー・ツァイト」に発表した、ガリチアについての短い物語が置かれている。これは大変機知に富み、皮肉のきいた傑出した文章であるとともに、旧オーストリア帝国下のガリチア地方を理解するのによい導入となると思うので、全文を訳出して本稿の冒頭に紹介することとしよう。

### イヴァン・フランコ『ガリチアの創造物語』<sup>2)</sup>

初めに火酒ありき。

太初火酒は混沌としていた。誰であれ蒸留しても、販売しても、自ら飲んでしまっても一向に構わなかった。

しかし、それから、ハンガリーのワインが国に入ってきた。そして、それは高かった。そこで神はワインを飲む者たちと火酒を飲む者たちとを分け、後者に前者に対する支配力を与えた。そこで、一方の者たちはただ火酒だけを蒸留したり飲んだりしなければならぬということになったのであるが、他

方の者たちのために蒸留し、彼らの儲けのために飲まなければならぬという事態に至った。——しかし、他方の者たちは出来上がった火酒を受け取り、ハンガリー・ワインをしこたま飲めるようにその火酒を売って、彼らの勘定の支払いに当てたのであった。

それが第二日であった。そしてそれは酒製造販売権<sup>3)</sup>と呼ばれた。

それは長い一日であった。その当時、ラテン語の *cuius regio, ejus religio*<sup>4)</sup> という言葉がガリチアの言葉に翻訳された。すなわち、「領主の支配地とは、すなわち領主の酒造販売権のことなり。」住民は二つの層に分けられた。火酒を飲むことが義務づけられた層は農民もしくは家畜と呼ばれ、農民が火酒を飲むことを主たる財源と見なした他方の層はシュラフチツェン<sup>5)</sup>、時には自由の英雄、祖国の救済者、国事のための殉教者、あるいは一般的に「民族」などと呼ばれた。

しかし、やがて国内は不穏な情勢となり始めた。「民族の聖地」が踏みにじられ、古い柵の杭が引き倒され、さまざまな屋台骨がぐらつきだした。古きものの擁護者たちは、次々に地歩を失っていった。最後には彼らは最後の砦に力を集中したが、それはまさに酒製造販売権であった。この権利は当時、聖者の列に加えられた。それに聖なるものの香りを付与した人々は、残念ながら、列聖されるのは死者のみであるということをおぼえていたのだ。後になってようやく彼らは過ちに気づき、このシュラフチツェンの民族性の聖なる防塁をどうすべきかを話し合った。光栄ある民族の伝統にふさわしく、この聖遺物の処遇を定めた——すなわち、売却することにしたのである。

それが第三日であった。そして、それは酒製造販売権の償却と呼ばれた。

そのとき、国会の中で厳かに、一人の男が立ち上がり、次のように言った。

「我々は2千人のユダのようであってはならない！我々が民族の聖なる宝を銀貨30枚で売ってはならぬ。しかたがないなら、もっと高く売ろう！少なくとも2倍は要求しようではないか！——数百万金グルデンの代価を！」  
全国会が彼に賛同し、感激して叫んだ。

「ブラヴォー！ブラヴォー！6千万金グルデン以下では引き渡すまい！」  
そのとき、国会の中でさらに厳かに二人目の男が立ち上がって、次のように言った。

「我々は2千人のユダのようであってはならない！我々が民族の聖なる宝を現物で売るのはよそう。しかたがないなら、なるほど名目上は売却され、譲渡され、死亡宣告されるかもしれないが、実際にはピンシヤンとしたまま

我々の手の内に残り、永年にわたって生きながらえることができるように、事実上の、つまり理論上の売却ということにしよう。」

議場に拍手の嵐が沸き起こった。上記のものが着席したとき、戸惑った声がネズミの鳴き声のようにか細く響いた。

「そうだね、しかし、どうやって？」

「しごく簡単なことさ。」例の第二の演説者は、荒々しく言った。「我々はただ裸の、理論上の権利だけを売る——つまり、火酒を蒸留して売る権利をね。蒸留酒製造所と販売店は相変わらず我々の所有物だ。後で我々と競争しようとする者が出てきたって構わんさ。そうしたけりゃ、やってみるがいい！」

「ブラヴォー！ブラヴォー！」全国会は満場一致で叫んだ。

しかし、そこで、国会の中でさらに厳かに第三の男が立ち上がり、次のように言った。

「敬愛する方々が前の演説で述べられ、提案され、我々が喜んで採択したことにしたがい、わしは、いや我々は皆、ユダの裏切りの謗りをきれいさっぱり免れたと感じておる。これは大変崇高で、心地の良い気持ちである。今やしかし、満足からビジネスへと移ろう。前の方々が演説の中で、酒製造販売権という事柄における我々との競争の可能性について述べられたことは、我々をすっかり不愉快な気持ちに、いや不安にさえしうるものだ。いいや、そうはさせん！我々の神聖なる宝を、行き当たりばったり通りかかった者が勝手にいじくり回すなぞとは——いいや、いかん！我々がそれを売らざるをえないのなら、では、それを我々自身に売ろうではないか。したがって、我々はなるほど金を手に入れるが、その代わりに実体を持ち続けるというのではなく、その使用権も我々自身の手の内に留めておかねば。まずはそのような償還でなければ、我々の伝統、聖なるものと化した我々の権益、我々の正義感にそぐわぬ。」

もの凄い拍手の嵐が議場に巻き起こった。演説者は胴上げされ、その体は持ち上げられたまま議場をぐるぐると回った。彼が再び床に下ろされた時、同じ当惑の声が再びネズミの鳴き声のようにか細く響いた。

「そうだね、しかし、どうやって？」

「しごく簡単なことさ。」と第三の演説者は荒々しく言った。「我々は我々の酒製造販売権を国全体に売りつけるのだ。」

「そうだね、しかし…」野党の声は大胆にももう一度ネズミの鳴き声のようにか細く響いた。

「『しかし』もかかしてもない！国がそれを買ひ、そして国の代表がそれを引き受け、管理するのだ。だが誰が国の代表だろうか？」

「我々だ、我々だ！」議場は声をひとつに鳴りどよめいた。

「無論そうだ。」と第三の演説者は結論づけた。「酒製造販売権はあらゆる形において、当初のままのものであり続ける。ただ個人の所有ではなく、国の所有になるだけだ。我々は金を受け取り、蒸留酒製造所と酒場を維持し、そして結局のところ行政府はこの新たな国家財産を手中に保ち続けるのだ。我々はそれを自分たちの間で賃貸ししあうことができるし、我々が気に入らないものには賃貸しを許さないことだって可能で、つまりところ、賃貸し料から生じる金だって——」

拍手喝采の嵐が、荒々しい演説者の最後の言葉を掻き消した。提案は採用され、厳密に実施された。

第4日は、ガリチアでは、現在に至るまで未だ明け染めていない。

## II. 多くの名を持つ都市

リヴォフという町の名前は、ナチスによるユダヤ人虐殺の蛮行に関するテレビのドキュメンタリー番組などで耳にしたことのある都市名であったが、筆者は恥ずかしながらそれがどこにあるのか7年程前まで知らなかった。ポーランドのどこかにある町なのだろうというほどにしか考えていなかった。1999年10月にウィーン大学の留学生用の寮に住むことになった。ここで、ÖAD 奨学金を受けてウィーンに来ていた多くの東欧からの留学生たち、特にウクライナ、ロシアからの大学院レベルの学生たちと知り合ったことがきっかけとなり、それまでまるで関心を持たずまったく予備知識を持ち合わせなかった東欧地域に、大いに興味をそそられることとなった。ウクライナから来ていた学生たちの大半が旧ガリチア地方の出身者で、特にリヴィウ、すなわちソ連時代にはリヴォフというロシア名で知られていた町から来ていた。この町には多くの名があると彼らは説明してくれた。ドイツ語ではレンベルク、ポーランド語ではルヴフ、ラテン語ではレオポリスというが、ウクライナ語ではリヴィウであることも教えられた。

なぜそれがわざわざ言及される事実であるのか当初筆者にはおよそ見当もつかなかったが、やがて少しずつウクライナ史を調べていくにつれ、まさにこの都市の名の多さこそが、西ウクライナ（＝旧東ガリチア）地域における複雑な支配者交代の歴史を反映しているのだということに気づかされた。都市名が言

語によって違っているのは当然と言えば当然で、イタリア語の Venezia がドイツ語では Venedig となり、英語では Venice、フランス語では Venise となることは言うまでもないことだ。しかし、殊リヴィウの場合、それだけの話ではない。

オーストリア統治時代のガリチアについての叙述のなかで、この都市はしばしばレンベルクという名で言及される。また例えば、戦間期にこの都市で生を受け、子ども時代を過ごしたポーランドの SF 作家スタニスワフ・レム (1921-2006) の回想録 (『高い城』1966) を読むならば、それは1930年代のポーランドの都市ルヴフとして登場する。<sup>6)</sup> ソ連時代にはこの都市は専らロシア名リヴォフで知られていたし、現在でもフライト・スケジュールなどをインターネットで調べる際、LVOV というロシア名のラテン文字表記が現れる。

### Ⅲ. 忘却された都市

旧オーストリア帝国時代の文学作品中での言及によってドイツ語圏の人々の記憶の中に留まっているガリチアのレンベルクは、イメージとしては今日のウクライナのリヴィウと容易には重なり合わない。ハプスブルク帝国の版図は広大であった。どこが属していたのかなど、誰が記憶していよう。ましてやリヴィウは現在ウクライナ領である。チェコ、スロヴァキア、ハンガリーはよいとして、旧ソ連の中にかつてのオーストリア領が存在していたなどということは、一般人の記憶からはほとんど消え去っていると言ってよかろう。ガリチアが長らくポーランドの支配下にあり、第一次ポーランド分割によってオーストリア領となり、第一次大戦後は再びポーランド領となっていたという事実も、ガリチアがどこかポーランドの一地方であるかのような印象を脳裏にぼんやりと残す一助となっているだろう。ここで筆者がこのように言う根拠は、ガリチアやレンベルクについてドイツ語圏の知人と語ろうとすると、決まって彼らの完全なる無知に遭遇してきたからである。そもそも、ウクライナ語がロシア語とは異なる言語であるということすら知らない人が多い。そこから推し測るに、旧オーストリア帝国で「ルテニア人」という民族名称がガリチアのウクライナ人を指すのに用いられていたこと、したがって「ルテニア語」とはウクライナ語のことを指すという事実<sup>7)</sup>さえ知らずに、旧オーストリア帝国の民族別統計資料<sup>8)</sup>を読み流しているというようなことも、稀ではなさそうだ。筆者の周囲の日本人ゲルマニストの反応から得た主観的印象であるが、「ルテニア人」の意味を知っている者は、(レンベルク生まれのザッハー・マゾッホや、ガリチア

出身のヨーゼフ・ロートなどの作家に深い関心を寄せる場合、あるいはイディッシュ文学の研究者の場合を別として) ドイツ語圏研究者よりもむしろ東欧・ロシア地域や東方ユダヤ人の歴史研究者の方に多いのではないだろうか。

シュテファン・ツヴァイクは第一次大戦前のオーストリア帝国を「昨日の世界」と呼び、急速に忘却の彼方へと消え去っていく失われた世界の記憶を愛惜こめて綴った。<sup>9)</sup> 昨日の世界の消滅と共に、ルテニア人が帝国の隅っこに存在した記憶も忘れ去られてしまったようだ。いや、それは現在では「一昨日の世界」と言ったほうがよかろう。第二次大戦後のソ連時代——ガリチアは1939年にナチス・ドイツとソ連との「秘密の議定事項」<sup>10)</sup>に基づき、スターリンによって無理やりポーランドから奪われソ連に編入され、その後ナチス・ドイツによる占領時代を経て、戦後は結局ソ連領となった——には、ガリチア地方は外国人の立ち入りが厳しく制限された地域であったため、<sup>11)</sup> ますます西欧にとってはあたかもこの世に存在していないかのような地域となってしまったからである。

#### IV. 多文化の平行的共存関係

この項では、18世紀末から第一次大戦末までのリヴィウという都市を構成していた主要な民族集団について、各々の民族の歴史的背景と帝国の中で置かれていた立場とを考察する。その際、その立場は他の民族との関わりにおいて規定されているので、記述は錯綜せざるをえない。また、それぞれの立場は平行していて、交わることがない。19世紀のハプスブルク帝国のような多民族を抱える大帝国の現実には、今日多文化主義やグローバリズムについて語られる際に見られるような融和と協調の理想からはほど遠い。この項の見出しに「共存」と書きはしたが、それは常に緊張を秘めた均衡の上に成り立っていて、一旦その均衡が崩れると、凶暴な憎悪が噴出するのであった。それは、単なる断片の寄せ集めである「サラダボウル」社会ではなく、支配—被支配の網の目が、細分化され、階層化され、複雑に入り組んでいた。バルカンだけが火薬庫であったわけではなく、東欧全体が複雑な民族のモザイクを成し、常に潜在的な危機を孕んでいた。近代化が進めば進むほど、民族間の競合関係は激しくなり、ナショナリズムの衝突は激しさを増していった。

ブリギッテ・ハーマンが『ヒットラーのウィーン』で示した19世紀末から20世紀初頭のウィーンの様子は、帝国の縮図であった。民族別に組織された学生集団の乱闘事件<sup>12)</sup>、チェコ系の市民に対する露骨な威嚇行動<sup>13)</sup>、反ユダヤ主義

の台頭<sup>14)</sup>、民族政党の乱立によって紛糾し、しばしば麻痺状態に陥ってしまう帝国議会<sup>15)</sup>など、おぞましいエピソードに満ちている。男子普通選挙の導入が、かえって民族間の闘争を熾烈にしていった。ユダヤ人を含めても帝国全体の人口のようやく4分の1程度にしかならなかった<sup>16)</sup>ドイツ系オーストリア人(=日常的ドイツ語話者)は、汎スラブ主義の台頭に苛立ち、自分たちのヘゲモニーを脅かされていると感じていた。(たとえそれが、ロシアの意図する汎スラブ主義とは異なり、オーストリア帝国内のスラブ系諸民族の団結を意味していたのであったとしても。)民族を言語で規定し、帝国構成民族それぞれの言語の平等が基本法によって保証されていたことが、却って、民族間の争いの火種となり、言語戦争の様相を呈していた。<sup>17)</sup>マイアーリングで心中を遂げた皇太子ルドルフは、ヴィクトル・ユゴの思い描いた「ヨーロッパ合衆国」がオーストリア=ハンガリー帝国では既に実現していると述べたが、それは現実とはあまりにかけ離れた理想にすぎなかった。<sup>18)</sup>

では、ハプスブルク帝国の東の果て、辺境の地ガリチア<sup>19)</sup>のレンベルクの状況はどうだったであろう。(ウィーン人の印象では辺境であるが、実はレンベルクは人口から言えば帝国第四の都市<sup>20)</sup>であって、古くからの大学<sup>21)</sup>もあり、1900年に完成した華麗な歌劇場<sup>22)</sup>もあり、ポーランド人にとってもウクライナ人にとってもコスモポリタンな文化の中心であった。)この都市の人口を構成していた主要な5つの民族集団(ポーランド人、ウクライナ人、ドイツ系オーストリア人、ユダヤ人、アルメニア人)について、個々に吟味していくこととする。(なお、これより先、レンベルクについて言及する際、ウクライナ名に基づく「リヴィウ」に表記を統一したい。<sup>23)</sup>何とんでもこの都市は、現在ウクライナの都市なのだから。)

### (1) ポーランド人

ガリチアと一言で言っても、オーストリア帝国時代には東ガリチアと西ガリチアが存在し、西ガリチアはクラクフを中心とする今日のポーランド南部であった。またリヴィウを行政上の中心とする東ガリチアにおいても、種々の特権により、ポーランド人がウクライナ人に対して中間的支配層の位置を占めていた。リヴィウはルテニアの首都でありながら、ポーランド人が支配する都市であり、ウクライナ人はそこでは少数派であった。しかし、東ガリチア全体を見れば、ポーランド人は「はるかに大きなウクライナ人の海の中の飛び地、島」<sup>24)</sup>のような存在であった。今日でも、クラクフとリヴィウの両都市を訪れると、その

面影の似通っていること、何か共通の雰囲気とでもいったものが漂っていることに驚かされる。建物や人々のたたずまいが、実に似ている。スティーヴン・スピルバーグの映画『シンドラのリスト』（1993）ではクラクフのゲッソーの場面が多数あったが、実はロケの一部は、（人件費が安い）ウクライナのリヴィウで行われたそうである。<sup>25)</sup>

ポーランドとウクライナの歴史上の関係は非常に複雑に込み入っている。そこには長い侵略と抵抗の歴史、支配・被支配の歴史がある。そのためリヴィウのような双方にとって重要な都市をめぐって形成される自己イメージは、よく似てはいるが裏返しの、鏡像のような反転関係にある。ジョージ・G・グラボヴィッチによれば、互いに他者に「影」を投影しあい、他者を周縁化し、時には悪鬼のごとく描き、この影としての他者を自己イメージ形成のために必要不可欠な存在としているのだという。<sup>26)</sup> それがまた、リヴィウという都市に対する両民族の態度（あるいは神話形成）に影響を与えている。リヴィウ／ルヴフはどちらの民族にとってもかけがえの無い「我らの都市」であり、歴史上重要かつ不可欠な構成要素である。グラボヴィッチはエルサレムにも匹敵するほどの激しい感情の備給がそこで衝突しあっているとさえ言う。<sup>27)</sup> つまり、リヴィウ／ルヴフはウクライナにとってもポーランドにとっても民族の「神話」であり、ある種の神聖さを帯びた存在ということになる。<sup>28)</sup> 東欧の都市は多かれ少なかれどこも似たような状況にあるが、それがこれほどの激しさにおいて表れた例は他に無いという。<sup>29)</sup>

17世紀以来のポーランド文学とウクライナ文学において互いをどのように表象し位置づけてきたかを、グラボヴィッチは詳細に論じている。ポーランド側から捉えられたウクライナ像の変遷を、グラボヴィッチは次のように4つの局面に分けて説明している。

- 1) 啓蒙主義および前ロマン派の局面。これは、「ウクライナに関わるポーランドの過去は、ポーランドが公正で秩序ある社会を築くことに失敗した先例であり、またその結果ウクライナ（コサック）側に生じた疎外がポーランドの没落、すなわちポーランド分割を招く重大な原因となったという見解が主として取られた」時期である。
- 2) ロマン主義的ウクライナ愛好、コサック愛好の局面。この時期、コサックの反乱時代は好んで取り上げられるロマン主義的テーマであった。これはポーランド文学史において初めて登場したロマン主義的に取り扱われた歴



史的主題であったため、後世への影響は広く深い。おおむね、ポーランドが中世の黄金期を経て、コサックとの戦いやハイダマキの反乱などの流血と苦難の時代を通り抜け、成熟期に至るという構図をもつ。

3) いわゆる実証主義および後期ロマン主義の局面。この時期に入ると振り子が反対側に大きく振れ、保守的な態度が台頭し、ポーランドに関わる歴史上のウクライナのイメージは憎むべき敵として否定的なものに変わる。ここで範例的な作品はシェンキェヴィッチの『火と剣とによって』であり、この作品が今日までもポーランドの大衆の抱くウクライナ人像・ウクライナ像に及ぼしている影響は大きい。ポーランド史、ポーランド的性格の「影」は、いまやウクライナ側に投影され、至極単純な善悪の二極化が姿を現す。(これは、第二次大戦直後のポーランド・ソ連軍対ウクライナ・パルチザンの戦いに主題を変えたにせよ、20世紀半ばの人気小説にも見られる。ウクライナ人は第二次大戦後数十年を経ても、血に飢えた野蛮人として描かれるのが常であった。)

4) 文学の影響が、政治的態度、近代的イデオロギーに及んだ局面。1860年ごろまでに、ポーランド人の態度は鋭く二極化した。ウクライナ人による別個の民族的アイデンティティーの主張とそれを源泉とする政治綱領を支持する(大体において左翼と重なる)少数派と、それに反対する多数派に。東ガリシアにおいても、ロシア領内の右岸ウクライナにおいても在住ポーランド人のかなりの部分が地主階級に属していたので、当然のことながら彼らの社会問題・民族問題に対してのスタンスは保守的なものであった。彼らがウクライナ人の独立したアイデンティティーを否認しようとした態度は、(ウクライナ独立に際しての)20世紀末のロシア人のそれと類似する。また、別個の民族であるというウクライナ人の主張に同情的であった少数派の場合でも、飽くまで留保つきであって、(正統的)文化伝統の二元性あるいは多元性を容認する態度はまずほとんど存在しなかった。<sup>30)</sup>

このようにポーランド側から眺められたウクライナ像は、啓蒙期から現代に至るまで、愛憎の両極間で複雑な振幅を示しながら変遷してきた。しかしいずれにせよそれは、自己のアイデンティティーを明確にするために他者に投影された自己の「影」であり、一種のオリエンタリズムであった。19世紀には国家としては消滅していたポーランドであるが、中世には大国として東欧に君臨した黄金時代があったのに対し、ウクライナの黄金時代ははるか昔のキエフ・ルー

シの時代であり、それを除けば、短期間続いたコサックの首長国家の時代ぐらいにしか栄光を見出すことができなかった。また、キエフ・ルーシの後継者を自認し、従来他からもそのように見なされてきたのは大国ロシアであり、ウクライナ民族の大部分がその支配下にあった。(このキエフ・ルーシの後継者問題については、ロシアの歴史学派とウクライナの歴史学派の間に論争<sup>31)</sup>があるという。)かつては右岸ウクライナ(ドニエプル川以西の地域)全域にポーランドの支配が及んでいたのが、1772年の第1次ポーランド分割によって、ガリチアはオーストリア領に(ブコヴィナについては、1774年にトルコから割譲された)、それを除く右岸ウクライナは第1次～3次ポーランド分割の結果ロシア領となったのである。しかし、これらの地域で、地主(シュラフタ)階級として、ポーランド人の支配的地位は温存されていた。<sup>32)</sup>

一旦地図から消え去ってしまったポーランドであったが、ナポレオンの時代にワルシャワ公国として一時復活していた。この国はウィーン体制の下、1815年、ポーランド王国(ロシア皇帝がポーランド国王)、ポズナン大公国(プロイセン国王がポズナン大公)、クラクフ共和国(ロシア、プロイセン、オーストリア3国の統制下にあった)に3分割され、実質的には列強の支配が継続した。<sup>33)</sup>皮肉なのは、ポーランドが既に第二次分割の前にヨーロッパで最も進んだ憲法(1791年5月3日憲法)を制定していたことである。<sup>34)</sup>ウィーン体制化でのポーランド王国でも立憲君主制が取られ、ロシア皇帝を君主として戴いていたにもかかわらず、その権力は議会によって制限されていた。<sup>35)</sup>クラクフ共和国は、その正式な国名を「自由、独立、厳正なる中立のクラクフ自由都市とその領域」<sup>36)</sup>といい、1815年クラクフ自由都市憲法<sup>37)</sup>とその後の1818年の憲法改正<sup>38)</sup>によって大幅に自治を保証されていた。1830年、フランスの7月革命に触発されたポーランド王国での11月蜂起失敗以後、ポーランド王国はロシアに、ポズナン大公国はプロイセンに併合された。ロシアに占領されたクラクフ共和国は、自治権を制限されつつもかろうじて命脈を保っていたが、これも1846年の叛乱の後まもなくオーストリアに併合されてしまった。<sup>39)</sup>こうして、ポーランドは再び地図の上から消滅し、第3次分割時の状態に戻ってしまった。しかし、1830年の11月蜂起失敗後、西欧諸国に大挙して亡命していたポーランド独立派<sup>40)</sup>は、パリ、ブリュッセルなどを拠点として活動を続け、独立革命の機会を虎視眈々とうかがっていた。

## (2) ウクライナ人

ウクライナ側から見たポーランド像はどうであろう。それは過酷な支配者というものである。オーストリアに支配され、同時にその枠組みの中で（国は消滅していたが）ポーランドに支配されるという二重の支配を受けていたガリチアのウクライナ人（＝ルテニア人）の立場は複雑である。オーストリアと南部ポーランドの間にコロニアルな支配・被支配関係があった一方で、ポーランドとルテニアの間にもコロニアルな状況が存在していたのだから。リヴィウでは、貧困と社会的後進性という桎梏からルテニア人を解放する手段として、若きイヴァン・フランコは社会主義に期待を寄せ、ポーランドの社会主義者と手を結んで共闘する道を模索していたが、やがて幻滅せざるを得なかった。<sup>41)</sup> 後期のフランコは次第に民族主義への傾斜を強めた。<sup>42)</sup>

リヴィウはポーランド人が圧倒的に優勢な都市であったが、もちろんこのルテニアの首都は当のルテニア人にとっても重要な文化的中心であった。村の鍛冶屋の倅フランコは、リヴィウ大学で高等教育を受けた。（妨害を受け、博士号の取得は拒否されたが。）雑誌「プロスヴィータ（啓蒙）」を発刊し、ウクライナ語の一般向け啓蒙的読み物を多数刊行し、都市や農村に読書室を開設し、演劇や音楽会などの文化的な催しを開いたプロスヴィータ運動もリヴィウの中心部に本部を置いていた。<sup>43)</sup>（フランコが一時期「プロスヴィータ」の編集長を務めた。）帝国の構成民族を公平に扱うというハプスブルク帝国末期の政策もあり、政府からの資金援助を豊かに受けたプロスヴィータ運動は着実に進展し、刊行物や読書室の数は増大し、運動は西ガリチアや東部ウクライナ、さらにはウクライナ系移民の住む他の国々にまで拡大していった。第一次大戦後のポーランド政府の下では、プロスヴィータは多くの読書室を閉鎖させられるなど運動を著しく縮小させられたが、政府から援助を受けずともよく健闘し、ウクライナ語の識字教育や農民啓蒙活動、実用・娯楽・啓蒙書の刊行および普及などに貢献し続けた。<sup>44)</sup>

オーストリア・ハンガリー帝国側のウクライナ人（西部ウクライナ人）はルテニア人と呼ばれていたが、今日のウクライナの残余の部分（およそ8割）はロシア帝国領内にあり、そこでのウクライナ人の公式名称は小ロシア人であった。大ロシア、小ロシア、白ロシア（ベラルーシ）は結局のところルーシであって、同一民族、あるいは少なくとも兄弟民族と看做された。小ロシア語はロシア語の方言として扱われ、<sup>45)</sup> 小ロシア語による出版は「分離主義」として危険視された。18世紀末、（既にロシア化しロシア語を話していた）ウクライナ人貴族たちが民族資料を収集し、研究していくにつれ、ウクライナ独自の言語・

民族文化という意識が芽生えた。<sup>46)</sup> ウクライナ語で書かれた最初の文学作品といわれるコトリャレフスキーの『エネイダ』は1798年に出版されている。1840年には今日でも国民詩人として敬愛されているタラス・シェフチェンコの詩集『コブザーリ』が現れた。1847年、シェフチェンコやクリシらのウクライナ民族主義者の啓蒙団体、キリロ・メトディー同胞団のメンバー全員が逮捕されるという事件が起き、シェフチェンコは10年も中央アジアに流刑に処せられた。(こうした一連の出来事の年号が、全ヨーロッパ的な規模で見た革命や民族主義的抵抗の動きとほぼ重なることは興味深い。) 1855年のニコライ1世の死後一時統制が緩み、1861-63年には雑誌「オスノーヴァ」に拠ったオスノーヴァ・グループにより民族主義的な主張が展開されたが、1863年(ポーランドで蜂起のあった年)に内相ヴァルーエフの通達によりウクライナ語による出版が制限された際、「オスノーヴァ」も廃刊に追い込まれた。その後は文芸のみがウクライナ語で書かれることを許可されていたが、1876年のいわゆるエムス指令後はそれも完全に禁止された。<sup>47)</sup> その結果ロシア領内のウクライナ文学者たちは、しばしばオーストリア領内でウクライナ語による著作を出版したのであり、ウクライナ民族主義の展開においてガリチアの果たした役割は特筆すべきものであった。<sup>48)</sup>

### (3) ドイツ系オーストリア人

リヴィウにはドイツ系住民の社会も存在した。オーストリア帝国において「ドイツ人」と言う場合、ドイツ語を日常生活の言語として使用する者を意味していた。つまり、「民族」の定義は主要使用言語であった。<sup>49)</sup> このため、ユダヤ人も多くの場合「ドイツ人」に含まれる。<sup>50)</sup> (イディッシュ語はドイツ語の方言と見なされた。) また、ドイツ系文化に同化し、ドイツ語を話すようになった他民族出身者も、民族別統計ではドイツ人に数えられることになる。<sup>51)</sup> たとえばザッハー・マゾッホの家族は、父方はスペイン系とチェコ系の祖先を持ち、母方はウクライナ系であったが、ドイツ語を日常語として生活していた。<sup>52)</sup> ザッハー・マゾッホの父親が警察署長であったという事実からも覗えるように、ドイツ系住民は数の上では少数派であっても、この都市の上層社会を形成していた。『ザッヘル・マゾッホの世界』で種村季弘は、リヴィウ出身の作家レオポルト・ザッハー・マゾッホの祖父ヨーハン・ネポムーク・ザッハーと父レオポルト・ザッハーについて次のように述べている。

(…) 1772年のポーランド分割に際してガリチアの統治権は首都ルヴォフとともにオーストリアに移った。第二次、第三次のポーランド分割とともに、このかつてのポーランド属領は亡命ポーランド人によってしだいに膨れ上がっていく。一方、オーストリア政府の管理体制もこれに応じて強化された。とりわけ第二次分割の分け前に与らなかったオーストリアは、第三次ポーランド分割以後ガリチアに強力な挺入れを試みる。そもそもヨーハン・ネポムーク・ザッヘルが岩塩採掘のためにここに派遣されたのもこの第三次分割直後のガリチア政策の一環にほかならなかったのである。

オーストリアとポーランドとの間の支配権交替劇の余波はネポムークの子レオポルト・ザッヘルの代に至っても続く。パリの七月革命に呼応した一八三〇年十一月二十九の叛乱と翌年の対ロシア戦争における惨敗の結果、多数の亡命貴族がガリチアに流れ込み、ルヴォフを中心に職業革命家集団の支部を結成した。一八三六年にルヴォフ警察署長に就任したレオポルト・ザッヘルは、当然、ウィーンのメッテルニヒの命を帯して亡命ポーランド急進主義者の動向に対処しなければならなかったのである。<sup>53)</sup>

2004年12月2日付けのウォール・ストリート・ジャーナル（オン・ライン版）の「オレンジ革命」関連の解説記事の書き出しは、リヴィウの警察署前にある「聖ゲオルギウスの竜退治」を主題とした彫刻を引き合いに出して、抑圧的な公権力と民衆の闘いの歴史を暗示する。

リヴィウ、ウクライナ——聖ユーリ（訳注：聖ゲオルギウスのウクライナ語名）の像は巨大な蛇の口に真っ直ぐ槍を突き立てて聳え立つ騎乗の勇者を描く。まるで運命の配剤であるかのように、そのモニュメントはこの西ウクライナの町の警察本部の向かいに据えられており、そこに民衆は今ひとつの災厄を追い払うために結集した。すなわち、リヴィウの警察署長を。<sup>54)</sup>

もちろんこの記事が直接に言及しているのは、キエフから任命されたウクライナ人の警察署長オリニク氏のことであったが、少し後の段落で、「(リヴィウは)ウクライナ民族主義の揺籃であり、その市民は14世紀以来、外国の権力によるのであれ同国人によるのであれ抑圧に抵抗してきた」<sup>55)</sup>と書かれるとき、記事冒頭のメタファーが歴史をほのめかしていることは明白となる。また、記

事の最後は聖ゲオルギウスがリヴィウの守護聖人であることに言及している。つまり、この聖人がウクライナの民衆に味方して、警察権力に対峙しているというわけだ。

1846年のガリチアの叛乱の際には、ウクライナ農民が皇帝側、すなわちオーストリア側に付いたことを考えるといささか皮肉に思われる。積年の恨みが積もるポーランド人が起こした叛乱に加勢するよりは、ハプスブルク家の支配による「寛大な束縛」の方をよしとしたのである。ここにも二重の支配のいびつさが見て取れる。再び種村によれば、

叛乱前のルヴォフは、当時四、五万の人口がはっきり二手に分裂していた。一方はドイツ人、ルテニア人、ユダヤ人の皇帝側、もう一方はポーランド人とその味方である。<sup>56)</sup>

ガリチアは中世以来ドイツ人の東方殖民の主な移住先のひとつであったことも付け加えておこう。<sup>57)</sup> 13世紀に、モンゴルの襲来で荒廃した都市の再建のために、ドイツ人の商人や職人たちが呼び寄せられた。この時代にウクライナに定住したドイツ人は、16世紀までには完全にウクライナに同化して、ウクライナ語を話すようになっていた。<sup>58)</sup> イヴァン・フランコも古いドイツ系移民の家系と言われる。<sup>59)</sup> 第一次ポーランド分割によってガリチアがオーストリア領になると、その2年後の1774年には女帝マリア・テレジアが勅許状を出してガリチアへのドイツ人移民を募った。この際、新教徒の移民にはリヴィウとブローディの2都市にしか移住を認めないという制約がつけられており、移住者の数もそう多くはなかった。ヨーゼフⅡ世の時代になってこの制約が無くなり、移民の数は大幅に増加した。1782から1790年頃までに15,000～20,000人のドイツ人がガリチアに入植した。ドイツ人が創設した町や村も多くある。1910年の東西ガリチア全土におけるドイツ人の人口は65,000人であった<sup>60)</sup>が、ポーランド人、ウクライナ人、ユダヤ人に比べて数の上ではずっと少数の集団であった。<sup>61)</sup> こうしたドイツ系開拓移民は、「この地方の政治的、文化的生活にあまり影響を与えなかった」<sup>62)</sup> という。

また、都市には「ドイツ人」の役人たちも居住していたが、実はこれらの中のかなりの者が——ちょうどレオポルト・フォン・ザッハー・マゾッホの父親のように——チェコ系であったようだ。

ドイツ語を話すオーストリアの役人たちが、リヴィウやクラクフ、またもっと低い度合いにおいて小規模の町々の行政府を支配したのは本当だが、これらの役人たちの中でガリチアに永住する者はほとんどいなかった。その上、多くの者は全然ドイツ系オーストリア人ではなく、むしろボヘミアやモラヴィア出身のチェコ人であって、彼らの公的身分のゆえに、地元の民衆からドイツ人と見なされただけであった。<sup>63)</sup>

#### (4) ユダヤ人

また、第四の民族集団として忘れてならないのは——統計上は民族とは見なされなかったとはいえ——ユダヤ人である。ナチスによるホロコースト以前のガリチアおよびブコヴィナはユダヤ人の人口密度が著しく高い地方であった。これは、中世から近世にかけて、ヨーロッパにはユダヤ人を追放し居住を禁じた国々がいくつもあったため、結果的にユダヤ人がポーランド・リトアニア連合国に集中することになってしまったためである。<sup>64)</sup> また、ポーランド分割の結果、オーストリアとロシアでユダヤ人の数が急激に増加することとなり、1776年に14,400人であったガリチアのユダヤ人人口は、1910年には872,000人と6倍以上に増加した。<sup>65)</sup>

リヴィウにも当然ユダヤ人の社会があった。中世のユダヤ人街の辺りは、今でも「エヴレイ (=ユダヤ人) 通り」という名がついている。19世紀にザッハー・マゾッホが、ガリチアのユダヤ人の生活を主題とした多くの物語を綴った。ガリチア全土に、ユダヤ人住人が多数を占めるシュテットルと呼ばれる小さな町が無数に散りばめられていたし、現在では、祖先がこの地域出身のユダヤ系アメリカ人がそうしたシュテットルの記録を調べ、自分たちのルーツ調査などしている。<sup>66)</sup> ナチスによるホロコーストによってガリチアのユダヤ人の古くからの伝統はほとんど絶えてしまった。現在ガリチアに住むユダヤ人は、第二次大戦後ロシア方面から移住してきた者の家系が大半だという。

オーストリアでは1781年の啓蒙君主ヨーゼフⅡ世の発布した寛容令(Toleranzpatent)により、ユダヤ人人頭税の廃止、ユダヤ人居住区の廃止、限定的な職業の自由が定められたが、市民権(Bürgerrecht)や親方になる権利(Meisterrecht)は与えられなかった。<sup>67)</sup> この寛容令はユダヤ人の同化を促すことを意図していて、ユダヤ人の子どもたちにドイツ語で学校教育を受けさせることとセットになっており、またさらに、ユダヤ人が親方になれない以上、ユ

ダヤ人が職業訓練を受けるのは必ずキリスト教徒の親方の下ということにならざるをえない仕組みであった。<sup>68)</sup> 寛容令とは言うが、ユダヤ人に対する重税や家族法は残存し、移動の制限はほんのわずか緩和されたにすぎなかったし、公用・商用文書におけるドイツ語の使用を強制し、兵役義務を課すなど、ユダヤ人を近代国家に統合するために逆に統制と束縛を強めるという矛盾した面があった。<sup>69)</sup> 大革命中の1791年にユダヤ人に市民権を与えたフランスに比べ、ドイツ、オーストリアの支配下にあった中央ヨーロッパでのユダヤ人解放は遅れていた。この地域でのユダヤ人解放は、19世紀全般を通じて漸次的に進展し、オーストリアでは1868年、ドイツでは1871年になってようやく完全な法的平等が達成された。<sup>70)</sup> (ドイツの場合、多くの領邦に分かれていたため、ひとつの法律の下にユダヤ人の完全な市民権が全土に普く行きわたるには、1871年のドイツ帝国の成立を待たねばならなかった。) ナポレオン戦争後の反動期には、フランス軍占領下で一旦認められたユダヤ人の権利が撤回され、差別的な法律が新たに制定されていった。(たとえば、1822年のプロイセン国王の布告は、ユダヤ人が教職や公務員の職に就くことを禁じた。) ようやく1848年の3月革命において新たな機運が生まれ、ユダヤ人を含む全国民に宗教の自由と平等な市民権を与える基本法が、フランクフルト国民議会においてもウィーンの帝国議会においても立法化されたが、これらも短命に終わった。1849年にオーストリアのフランツ・ヨーゼフ皇帝が発布した憲法には権利の平等に関する条項が存在していたが、2年後には取り消され、その後まもなく、ユダヤ人による不動産の所有と帝国内特定地域への立ち入りを禁ずる法律が改めて制定された。<sup>71)</sup>

ユダヤ人が初めて完全な平等を得たのは、1867年のオーストリア・ハンガリー帝国基本法によって全国民の平等が承認されたときであった。法的平等を獲得してもなお、ガリチアのユダヤ人は経済的には貧窮に喘いでいた。ベルタ・パッペンハイムはガリチアを何度も旅し、少女売買横行の原因となっていた貧困の実態と原因を調査した。<sup>72)</sup> (フロイトが「転移」の理論を発見するきっかけとなったのは有名なアンナ・Oの症例によってであったが、この患者の実名がベルタ・パッペンハイムである。) しかしながら、19世紀後半ユダヤ人に関する法的規制緩和が進行するにつれ、多くのユダヤ人のプロレタリアート、農業従事者が生まれ、農地管理人や酒場の主人はユダヤ人であることが多かった。<sup>73)</sup> こうして、民族間の競争関係はさらにその複雑さを増すこととなった。H・ハウマンの『東方ユダヤ人の歴史』のガリチアの項によれば、



(…) ユダヤ人は、単に増え続ける社会的、経済的紛争に陥ったのみならず、ポーランド人、ルテニア人、ドイツ系オーストリア人、さらにカトリック教徒、ロシア正教徒、東方帰一教徒といった、あらゆる陣営間において先鋭化を続ける民族的、宗教的対立の状況下に置かれてもいた。<sup>74)</sup>

さらに、ガリチアは、宗教的、思想的、政治的に「東方ユダヤ人の中心地」<sup>75)</sup>でもあった。ラビ主義の保守的伝統も根強かったが、同時にユダヤ教敬虔主義(ハシディズム)の中核地帯でもあり、<sup>76)</sup> ユダヤ人の啓蒙運動(ハスカラ)もまた西ガリチアのクラクフ、東ガリチアのブローディ、テルノポリ、リヴィウといった都市を拠点として活発に展開していた。<sup>77)</sup> また、シオニズム関連では、1883年にリヴィウに最初のユダヤ民族国家派の組織が設立され、1897年にバーゼルで開催された第1回シオニスト会議では、タルヌフ出身のアブラハム・ザルツが副議長に選出された。<sup>78)</sup> 民族派ユダヤ人は90年代初めには「ユダヤ人民族党」を創設した。1907年の帝国議会下院選挙(初の男子普通選挙)で議員に選出された13人のユダヤ人のうち4人がガリチアおよびブコヴィナ出身のシオニストであった。<sup>79)</sup>

#### (5) アルメニア人

第五の集団は、アルメニア人である。リヴィウには「アルメニア通り」が存在し、東方キリスト教の一派であるアルメニア教会の美しい礼拝堂も存在している。中世において東方との交易で栄えたこの都市の多文化性を語る場合に必ず言及されるエピソードである。現在アルメニア使徒教会が使用している聖堂は、かつてはアルメニア・カトリック教会(帰一教会)の所有であったが、現在リヴィウにアルメニア・カトリック教徒は残存していないらしく、1991年リヴィウ市議会は、この聖堂をアルメニア使徒教会(ややこしいが、要するに元来のアルメニア教会)に与えることを決定した。<sup>80)</sup> 教会内部には19世紀末頃の美しいユーгентシュティルの壁画による装飾が見られるが、特に内陣の天井と側壁を覆うモザイクは見事である。

アルメニア人はユダヤ人に似て、宗教をアイデンティティーとしており、過去にしばしば迫害を受け、中近東、ヨーロッパ、中央アジア、インド、南北アメリカ、オーストラリアなど世界中に離散している。アルメニア教会は古代のアルメニア王国が4世紀初め(303年)にキリスト教を国教として採用したことに遡る非常に古いキリスト教会である。(ローマ帝国での313年のミラノ勅令、

380年のテオドシウス帝によるキリスト教国教宣言よりも古い。)もともとの出身地であるコーカサス南部に現在はアルメニア共和国が存在しているが、これはかつてペルシャの領土となり、やがてロシア帝国の領土となった地域である。第一次大戦後の短期間の独立(1918-1920第一共和国)の後、ソ連の一部を構成するアルメニア・ソヴィエト社会主義共和国となっていたが、1991年に再び独立を果たした。かつては、隣接するトルコ側にも多数のアルメニア人が住んでいたが、オスマン朝時代の1894-96年にトルコ軍による何十万ものアルメニア人の虐殺、また青年トルコ党時代の1915年-23年には80万人以上もの虐殺が生じた。<sup>81)</sup> こうして、大部分の者が殺されるか国外に逃れるかしたため、トルコにおけるアルメニア人の人口は激減した。トルコは現在に至るまでこの事実を否定し続けている。<sup>82)</sup>

ヨーロッパにおいて11世紀にアルメニア人が最初に住み着いたのはキエフ・ルーシ時代のクリミア半島であった。やがてそこからルーシの諸公国(キエフ・ルーシは多くの小公国に分裂していった)へと居住地域を広げていったが、13世紀のモンゴル来襲の後にはハリチ・ヴォルイニ(ガリチア・ヴォリニア)公国方面に集中していた。<sup>83)</sup> ハリチ・ヴォルイニ公国の名君ダニロは1240年のキエフ陥落の後も、東欧の有力国として勢力を維持していた。リヴィウの創建はこの時代に遡る。公国の都ハリチが、モンゴル軍の攻撃によって荒廃した後、1256年、この都市が築かれた。<sup>84)</sup> この都市の名はダニロの息子レヴ(Lev)に因んでリヴィウ(L'viv)となった。<sup>85)</sup> 因みにウクライナ語の「レヴ」は普通名詞としては「ライオン」を意味し、ラテン語であればLeoに相当する名である。したがってリヴィウのラテン語名はLeopolisとなる。

14世紀にガリチアがポーランド領になっても、アルメニア人は固有の宗教を維持することを許され、独自の裁判権を認められていた。1364年、リヴィウにはアルメニア教会の主教座が設けられ、この主教区の管轄はルテニア、モルダヴィア、ワラキアであった。アルメニア人は国際的な交易ネットワークを組織する商人の民として、また有能な職人集団として繁栄した。

やがてローマ・カトリックへの改宗を迫る圧力が強まり、教会合同を選択せざるを得なくなった。17世紀にイエズス会がアルメニア人のための神学校をリヴィウに創設したため、リヴィウはアルメニア研究とアルメニア文学の中心地となった。アルメニア・カトリック教会は、ハプスブルク帝国の支配下でも、戦間期のポーランド時代にも存続していたが、ソ連時代には禁圧を受けた。こうした弾圧はギリシャ・カトリック教会を含む帰一教徒全般に当てはまる。お

そらく、ソ連政府はヴァチカンとの繋がりを危険視したのであろう。<sup>86)</sup>

リヴィウのアルメニア人は、19世紀末には1500人ほどしか存在せず、ポーランド語を話し、ポーランド文化に同化していた。<sup>87)</sup> 近年の人口調査では、1000人ほどのアルメニア人の子孫がリヴィウに残存しており、(結婚による改宗を含むのか) 教会の信徒数は1500人ほどだという。<sup>88)</sup> 旧ソ連全般に言えることであるが、ソ連時代に抑圧されていた宗教は再生し、再び民族意識の拠りどころとなっている。民族とは結局のところ何であろうか。言語、文化、宗教と民族のアイデンティティーの支柱となるものはさまざまであるが、アルメニア人の場合、やはり宗教が核なのであろう。

2003年5月18日にリヴィウのアルメニア使徒教会が再献堂式を執り行ったとき、フランスのシャンソン歌手シャルル・アズナヴールも招かれて列席した。<sup>89)</sup> (アズナヴールはアルメニア系フランス人である。)

アルメニア人ではないが、前教皇ヨハネ・パウロⅡ世は2001年6月リヴィウ訪問の際、たつての希望でアルメニア使徒教会の聖堂を訪れた。<sup>90)</sup> (ウクライナ人やポーランド人の帰一教徒も多く住んでいた) かつての西ガリチアの中心都市、クラクフの出身であった前教皇には、東方諸教会への深い造詣があったと思われる。エキュメニズムのために精力的に行動した教皇であった。

#### (6) 宗教および言語の多様性

おおむね民族集団の多様さと重なりあうのだが、宗教の多様さについても触れておくべきだろう。オーストリア時代のレンベルクの主要なキリスト教宗派は、ローマ・カトリック教会、ウクライナ・ギリシャ・カトリック教会、ロシア正教会、アルメニア・カトリック教会であった。またもちろんユダヤ教のシナゴグも複数存在した。

今日リヴィウ旧市街は、ユネスコの世界遺産に登録されている。教会建築の夥しさにも驚かされるが、印象深いのはその建築と内部装飾の様式の多様さであり、東西の様式の混在、混交である。ガリチアのウクライナ人の宗教は主としてウクライナ・ギリシャ・カトリックであるが、この宗派は、元来正教であった地域がローマ・カトリックを奉じるポーランドの支配下に入ったために、次第に改宗への圧力を受け、その結果、妥協の産物として生まれたものだ。ローマ教皇の首位権を認めて教会合同はしたものの(1596年、ブレストの合同)、ローマ・カトリック教会との約定に基づき、ギリシャ式典礼(=ビザンチン典礼)を守る権利を保証されている。ローマ式典礼のカトリック教会ではなく、

ギリシャ式典礼なので、「ギリシャ・カトリック」と呼ばれ、区別されている。ドイツ系オーストリア人やポーランド人の通う教会がローマ・カトリック教会であるのに対して、ウクライナ人はギリシャ・カトリック教会に通い、その聖堂内には、至聖所の祭壇の前にイコノスタシス（聖障）があり、夥しいイコン（聖像）が壁面を覆っていて、ローマ式ミサではなく金口聖ヨハネの奉神礼式文が朗読されるのであった。東方教会の伝統を守っているため、司祭は妻帯している。儀礼や習慣などの外見上の違いに基づいて正教徒とギリシャ・カトリック教徒を区別することは難しい。リヴィウの建築群に混在する東方的要素は、初めてこの都市を訪れるよそ者には、あたかもここからロシアが始まるかのような印象を与える。（キリル文字の使用もその大きな要因であろう。）しかし、見慣れてくると、この都市が全般的にはむしろポーランド、オーストリアの都市に近い雰囲気を持っていることが、明瞭に見えてくるはずだ。それと同じように、宗教、言語、精神性などの西欧との表面上の違いは、実は、第一印象では容易には気づかれえない西欧との微妙な近さも隠し持っているように思われる。

筆者のロシア語およびウクライナ語の知識は浅く、ポーランド語に至ってはまったく学習歴が無い。したがって、確かなことは言えないのだが、ウクライナ語は語彙の点でポーランド語の影響をかなり受けているようだ。文法構造はロシア語とあまり変わらないようだが、語彙の点ではむしろポーランド語の方に近いのかもしれない。筆者が一年間指導したウクライナ人留学生によれば——ケーブル・テレビで外国の番組を見ることができるよう——ロシア語やポーランド語はテレビのドラマを見ているうちに、自然に理解できるようになるそうだ。ウクライナ語がキリル文字で書かれるのに対し、ポーランド語はラテン文字である。一見、まったく違うような印象をもつが、両言語が併記されたようなテキストを見比べてみると驚くほど似ている。民族を分かつものは何なのか。なかなか微妙なところである。ところで、ポーランド語は第二次大戦前のリヴィウでは最も優勢な言語であったが、今日でもポーランド系のローマ・カトリック大司教座聖堂ではポーランド語で説教が行われている。

ウクライナは文化的、言語的、地理的にまさにボーダーにある（つまりロシアとポーランドの境界的な位置にある）ので、歴史上、そのどちらに対してもアイデンティティーを明確にする必要が生じざるをえなかった。ナショナリズムが形成されるのは、常にそのような地点においてではないだろうか。

### (7) 帝国支配の原理：「分割して統治せよ」

多民族国家であったハプスブルク帝国は、統一を保つために苦慮しなければならなかった。その統治は民族間の複雑な力の均衡の上に成り立っていた。この項の見出しに「多文化の平行的共存関係」と書いたが、それは互いに平行的で交わらないという意味であり、「並列的」という意味ではない。帝国政府とハンガリー人、ポーランド人、チェコ人などの比較的有力な民族グループ、ルテニア人により下位の階層に位置付けられた少数民族、解放後も反ユダヤ主義の台頭に脅かされていたユダヤ人と、階層化されたさまざま民族集団相互の間に、微妙かつ時には凶暴な政治力学が働いていた。それにはまた、積年の怨恨、嫉妬、憎悪が複雑に絡みあっていた。不平等な階層間の葛藤は、結果的に帝国そのものに向けられる反抗と憎悪を緩和する作用をもつ。「分割して統治せよ」という植民地政策の原則が、ハプスブルク帝国にも当然適用されていたわけである。

二重君主国の強みはその広大さ、実質的な経済の自己充足性、そしてスイス国境からカルパチア山脈に至る通商の機会に恵まれていたことに存していた。その弱みは、その民族的多様性に存したというよりも、「分割して統治せよ」という格言の精神において少数民族に対してなされた不平等な取り扱いに存した。<sup>91)</sup>

1867年のいわゆるアウスグライヒにおいて、ハンガリー王国はオーストリア帝国と対等の地位を獲得し、その結果「オーストリア＝ハンガリー二重君主国」が誕生したが、ハンガリーと同じような地位に対するボヘミアの要求は「著しく無視され」<sup>92)</sup>続けた。アウスグライヒ以降、ハプスブルク帝国はオーストリア側（Cisleithanien）とハンガリー側（Transleithanien）に分けられ、各々独立の議会を持つが外交・軍事を共通にする同君連合の体裁を取っていた。これも一種の分割統治政策であって、分割の際ハンガリー側もクロアチア人、スロヴェニア人、ルーマニア人など他の多くの少数民族を抱えこむよう仕向けられた。（1868年にはハンガリーとクロアチアとの間で一種のアウスグライヒが行われ、アウスグライヒの中のアウスグライヒという奇妙な二重の体制が生まれた。しかし同時に、ハンガリーのマジャーリ化政策の枠内での一定の自治の容認にとどまり、クロアチアに完全な平等が実現されることはなかった。）ツィスレイターニエンには、チェコ人、スロヴァキア人、ポーランド人、ルテニア人、イ

タリア人などがいた。1861年のイタリア王国の創建に際してロンバルディアが、1866年ウィーン和約によってヴェネチアが、オーストリア帝国から分離していったが、オーストリア=ハンガリー領であったイストリア、ダルマチアに対する「失地回復」の要求 (irredentismo) はイタリア民族の大義として、帝国内のイタリア系住民に支持されていた。<sup>93)</sup> ポーランドでは1830年と1846年に蜂起が起こったし、1848年の革命ではブダペストだけではなくプラハも不穏な情勢であった。

数々の叛乱や革命も抑え込まれ、ハンガリーとの妥協も成立し、「分割して統治せよ」という帝国支配の原理は、19世紀後半のオーストリア・ハンガリー二重君主国において表面上は非常に功を奏しているように見えたが、第一次世界大戦の終結とともに結局帝国は瓦解し、東欧にいくつかの新しい民族国家が生まれることとなった。

しかし、ガリチアでは、1918年11月13日に西ウクライナ国民共和国の独立が宣言されたにもかかわらず、この政府はポーランド軍の侵攻により僅か8ヶ月で東ガリチアから追い払われてしまう。分離独立の動きは、ポーランド側から見れば、叛乱に他ならなかった。(西ウクライナ国民共和国政府は東部ウクライナに逃れ、東部で成立したウクライナ国民共和国のディレクトリア政府と合流したが、この政府もポーランド、ロシアの赤軍、反革命の白軍、ルーマニア軍、フランス軍などの攻撃に四方から晒され、しかもアナーキスト軍などのパルチザンによる叛乱もあちこちで起きたため、「近代のヨーロッパ史上においても例を見ないような無秩序な内乱状態」<sup>94)</sup> に陥り、結局ロシアのポリシェヴィキに敗退していった。) 第一次大戦後のヴェルサイユ体制の下で、ガリチアは結局ポーランドの支配下にあり続けた。<sup>95)</sup>

## V. ウクライナ文化復興とガリチア

ウィーンの第1区のポストガッセ8番に聖バルバラ教会という東方帰一教徒のための教会がある。現在祈祷のためにこの建物を主として使用しているのはウクライナ・ギリシャ・カトリック教会であり、同郷人とのコンタクトの場として、ウィーンのウクライナ人ディアスポラ社会にとっては重要な施設である。(2005年にはウクライナのユーシェンコ大統領が、この教会を表敬訪問したというニュースが報道された。<sup>96)</sup> この教会の前に記念碑としてイヴァン・フランコ (1856-1916) の胸像が据えられている。この教会のホームページによればそれほど古いものではなく、1999年に設置されたものである。<sup>97)</sup> イヴァン・

フランコはウクライナ文学史上、タラス・シェフチェンコ（1814—61）に次ぐ偉大な国民詩人とされている。<sup>98)</sup> ウクライナの学校の教室には、シェフチェンコやフランコの肖像がよく壁に掲げられている。<sup>99)</sup> シェフチェンコに関しては、明治時代から詩の日本語訳がいくつかあり、日本でも僅かに知られているとしても、フランコに関してはどうであろう。もちろん国立情報学研究所の書籍検索で「Ivan Franko」で検索すると、83件の洋書（主にロシア語とウクライナ語）がヒットするのだから、研究者は存在するのだろう。それにしても、ウクライナで国民詩人とされるような作家が、日本では一般的にはほとんど知られていないのだ。ウクライナの国土面積、人口などから見ても、これはかなり不当なことと言わざるをえないが、おそらく、ウクライナという国が長らく分割された状態で大国の支配下にあったことが原因であろう。また、ロシア帝国時代からソビエト時代にかけて、ウクライナ語が（1920年代の一時的かつ例外的な「ウクライナ化」の時代を除き）受けた不当な扱いにも起因しているだろう。19世紀、ウクライナ出身のゴーゴリは、世間に認められるためにロシア語で執筆し、ロシア文学史上の輝く星となった。一方、シェフチェンコはウクライナ語で詩を書いたことがロシア皇帝の不興を買い、詩を書くことを禁止され、10年もの流刑に処せられたのである。<sup>100)</sup>

ウクライナ語が文学言語として洗練されていく過程で、ガリチアの果たした役割に対する評価は高い。エムス指令によってロシア領内でのウクライナ語による出版や上演が一切禁止されると、オーストリア統治下のガリチアは多くの東部ウクライナの知識人や作家たちの亡命先となり、その結果彼らの文学言語はガリチア的刻印を帯びることとなった。<sup>101)</sup> シェフチェンコやオスノーヴァ・グループによってロシア帝国内で確立されたウクライナ文語はガリチアにおける刊行物においても標準となっただけで、[ガリチア固有の要素を採用しつつ]<sup>102)</sup> であった。青年時代のイヴァン・フランコに大きな影響を与えたミハイロ・ドラホマノフ（有名な女流詩人レーシャ・ウクラインカはその姪）のウクライナ文語にもガリチア的要素が認められるという。<sup>103)</sup>

1848年の革命以後、ヨーロッパのいたるところで民族主義が高揚し、民族文化の復興が叫ばれていた。しかしロシア帝国下では、ウクライナ語を称揚する者は分離主義者として厳しく取り締まりを受け、民族言語・民族文化の発展が阻害されていた。そのような時代背景の下、（ロシアに比べ）比較的自由な状況があったオーストリア治下のガリチアが「ウクライナ文化復興」の中心となったことは自然な成り行きであった。<sup>104)</sup>

## VI. イヴァン・フランコと『狐ミキータ』

イヴァン・フランコは1856年8月27日東ガリチア州ドロホヴィッチ郡ネフエヴィチで鍛冶屋の息子として生まれた。<sup>105)</sup> 1875年にドロホヴィッチのギムナジウムを卒業後リヴィウ大学で西洋古典学とウクライナ語学・文学を学んだ。<sup>106)</sup> 在学中に、学生雑誌「友」の編集部に加わり、同誌に最初期の詩や小説を発表している。1877年、社会主義宣伝活動のかどで友人パヴリクらと共に逮捕され、8ヵ月間拘留され取り調べを受けたが、判決は結局6週間の禁固刑であった。<sup>107)</sup> 釈放後、再び熱心に政治活動に身を投じた。この頃マルクス、エンゲルスの著作を熱心に読み、ポーランド人の社会主義者らと交際し、ポーランド語の新聞「Praca (労働)」に寄稿したり、社会主義者によって組織された労働者教育活動に関与したりした。<sup>108)</sup> 1878年にはパヴリクと共に「フロマダ (=共同体) の友」という雑誌を創刊したものの、当局に没収処分を受けたが、雑誌名を変えて刊行を続けた。<sup>109)</sup> 1880年には再逮捕され、3ヶ月後には釈放されたが、当局の監視下に置かれ、さらにリヴィウ大学からも退学処分を受けた。<sup>110)</sup> (これは現在山口大学教育学部が学部間協定を結んでいるイヴァン・フランコ記念リヴィウ国立大学のことである。この頃のリヴィウ大学はポーランド語で授業が行われる、圧倒的にポーランド人の大学であったとはいえ、<sup>111)</sup> また、この大学がフランコの名を冠すようになったのはずっと後のことであるとはいえ、<sup>112)</sup> 皮肉な話には違いない。)これ以降のフランコは、詩や小説、文芸批評や政治論文などの執筆、世界文学の翻訳、雑誌の編集などの仕事に精力的に邁進した。1890年にはウクライナの統一と独立を標榜するウクライナ急進党を設立した。<sup>113)</sup> 大学教育を終えるために、1892年チェルニフツィ (チェルノヴィッツ) で勉学を再開し、最後に残っていた1学期を履修した。<sup>114)</sup> さらにウィーン大学でスラブ語学・文学のゼミを1学期受講した後、1893年にウィーン大学のスラブ文学教授ヤギッチの下でドイツ語による博士論文「Über Barlaam und Josaphat und die Einhornparabel」を提出し、博士号を取得した。<sup>115)</sup> この論文のオリジナルの手稿はキエフにあるウクライナ国立科学アカデミーのシェフチェンコ文学研究所の手稿セクションにあるという。<sup>116)</sup> 筆者は残念ながらこのドイツ語のオリジナル原稿をまだ見ていないが、フランコは後にこの論文のウクライナ語版をリヴィウで刊行した。これは、ソ連時代に出版されたイヴァン・フランコ全集にも収められている。それを見ると、フランコがこのキリスト教世界に紛れ込んだ仏陀伝のさまざまな言語による異本を比較し、対照表にして論文に付していることがわかる。<sup>117)</sup> 西洋古典学を学んだのだから古代ギリシャ語はよいとして、



ゲルジア語やアラビア語のテキストを彼は原文で読んだのであろうか？フランコはドイツ語、ポーランド語、ロシア語を駆使して各言語の新聞・雑誌に寄稿しており、一種の語学の天才であったことは確かである。しかし、彼の翻訳はシェークスピア、ゲーテ、バイロン、コンラッドばかりか、インドやアラビアの叙事詩から北欧の近代詩や演劇にまで至っており、あまりにカバーする領域が広すぎる。古代バビロニアの叙事詩の訳に付された注を見ても、ドイツ語訳を底本としたことは明らかである。<sup>118)</sup>

イヴァン・フランコとドイツ語・ドイツ文学との関わりは深い。ドロホヴィッチのギムナジウム時代に、彼はドイツ語を完璧にマスターしていた。<sup>119)</sup> 級友の中には多くのユダヤ人がおり、休憩時間には恒常的にドイツ語が話されていたことが推測されている。<sup>120)</sup> 後に彼の仕事の重要な要素となった外国文学の翻訳は、ドイツ文学に関しては、ゲーテ、シラー、ハイネ、C.F.マイアーなどの詩、クライストの小説のほか、ゲーテの『ファウスト』第一部、『ヘルマンとドロテア』、そして翻案ではあるが全面的に『ライネケ狐』に依拠した『狐ミキータ』を含んでいる。レオニード・ルドニツキーは『イヴァン・フランコとドイツ文学』の中でフランコの翻訳を丹念に吟味したが、当然のことながら、その際大きく取り上げられているのは『ファウスト』や『ヘルマンとドロテア』である。<sup>121)</sup>

しかし、今日、フランコの作品の中で最も愛好され、もはや単なる翻案の域を大きく越え出ている『狐ミキータ』は、児童文学とはいえ、フランコの代表作のひとつと言っても差し支えは無かろう。<sup>122)</sup> この物語はウクライナでは、今日でも非常に親しまれている。話の基本線はほとんどゲーテからそのまま取られているが、この物語がそもそもゲーテのオリジナルではなく、中世フランスの『狐物語』に遡り、幾世紀にもわたってヨーロッパ各国でさまざまなヴァリエーションを生み出してきたことを考え合わせると、フランコはその全ヨーロッパ的伝統に新たな傑作を付け加えたのだと言っても決して不当ではない。表面上の相似にもかかわらず、フランコはゲーテの創り出した狡猾でとことん陰險な「悪漢」の世界を根本から改変して、真に機知と諧謔に富み、感動的ですからある魅力的な物語を生み出した。いまや、ライオンの王を戴く動物王国の寓意は単に愚劣な宮廷人を揶揄しているのではなく、多民族国家オーストリア・ハンガリー帝国（そしてガリチア）における潜在的民族対立という酷薄な現実に対する鋭い風刺となっている。<sup>123)</sup> 動物たちは（どの民族と特定はできぬが）民族集団の寓意となっていて、たとえば、狼や熊は中間搾取を行うポーランド人

のような立場にある。しかし、こうした悪役の動物たちは決して単なる悪党として平板に描かれるのではなく、彼らには彼らなりの切実な状況があり、逃れられぬ現実があってそうなのだとすることも、きちんと描きこまれている。<sup>124)</sup> 弱肉強食の残酷なこの世界を、いかに知恵と勇気をもって生き延びていかねばならぬか、フランコは寓話を用いて語りかけている。<sup>125)</sup> その際、その語りかけの対象はもちろんまずはウクライナ民族なのだが、しかし、それは民族という狭い枠を超え、普遍的な真実をもって我々すべての読者の心に訴えかける。

支配民族の言語と文化に対して、フランコの態度はアンビヴァレントなものではない。支配民族の優越性の前に屈辱を感じながらも、ためらいがちに受容せざるをえないというのではない。彼の姿勢には、卑屈な追従や傲慢な拒否は微塵も感じられない。ドイツ文学を受容する際の彼の姿勢は、創造的であり、また戦略的でもある。彼の民族愛は、ウクライナ民族を孤立させ、世界から隔絶し、後進性の中に置き去りにするようなことを肯んじない。<sup>126)</sup> 彼がドイツ語を通して世界文学に接続されたように、ゲーテやシェークスピアのウクライナ語への翻訳、(たとえ重訳であろうと) 古代から現代に至るあらゆる優れた世界文学のウクライナ語への翻訳という壮大な計画は、ウクライナ民族の知的空間を拡張し、ウクライナ語の地位と名誉を高めるものとして構想されていたのだと思われる。つまり、ウクライナ民族が、自らの言語を通して普遍的教養にアクセスできるということこそが重要なのであって、ウクライナ人が主流文化に同化することを目的としていたのではない。ウクライナ語とウクライナ民族のアイデンティティーを確立するためにこそ、外国文学の受容は重要な意義を有していた。翻訳に際し、フランコが翻案という手段をしばしば採用したのは、まさにこのためであって、単に分かりやすくするためというのではない。翻訳あるいは翻案を通じて、外国の物語はウクライナの物語に変容し、真にウクライナの一部となる。『ライネケ狐』は創造的に解釈しなおされ、ウクライナ文学の傑作、『狐ミキータ』として生まれ変わるのである。<sup>127)</sup>

本稿では、フランコの作品について詳細に吟味する余力が無いので、まずはオーストリア・ハンガリー帝国下での東ガリチアとその中心的都市リヴィウをめぐる問題を提示し、そこに生きたウクライナ人作家イヴァン・フランコがどのように主流文化としてのドイツ語・ドイツ文学に関わったかを示唆する程度に留めざるをえない。イヴァン・フランコの文学テキストに則してより深く考察する機会を、次稿に譲ることとしよう。

## 【註】

- 1) Stefan Simonek und Alois Woldan (Hg.), *Europa erlesen. Galizien* (Klagenfurt / Celove, 1998), S.11-15.
- 2) 「Schöpfungsgeschichte」は、「創造物語」という本来の意味に、schöpfen (汲む)、すなわち「酒を酌む」の意味をかけていると解せば、読み込みすぎであろうか。もし駄洒落が意図されているとすれば、「酒販売の歴史」とも解せる。
- 3) ドイツ語原文では、Propination。ウクライナ語では「プロピナーツィヤ」。
- 4) 「支配する者が自分の領地の宗教を決する」の意。
- 5) ポーランドのシュラフタに属する下級貴族。ウクライナ語では軽蔑的な意味を含んだ「шляхтич」に当たると思われる。University of Toronto Press の『Ukrainian-English Dictionary』(8th printing 2004)によれば、「шляхтич」の意味には、「nobleman, country squire」の他に、「worthless (bad) nobleman」がある。
- 6) スタニスワフ・レム『高い城』沼野充義他訳、国書刊行会、2004年。
- 7) 黒川祐次『物語 ウクライナの歴史—ヨーロッパ最後の大国』中公新書 164、中央公論新社、2002年、p.152。
- 8) ハプスブルク帝国における民族別人口統計は、日常使用している言語のみを基準としていた。(Brigitte Hamann, *Hitlers Wien. Lehrjahre eines Diktators*, 8. Auflage, [München, 2006], S.128)
- 9) Stefan Zweig, *Die Welt von Gestern. Erinnerungen eines Europäers* (Stockholm 1944)。
- 10) 『ヨーロッパの歴史 欧州共通教科書』第2版、フレデリック・ドルーシュ総合編集、木村尚三郎監修、花上克己訳、東京書籍、1998年、p.342。
- 11) Martin Pollack, *Galizien* (Frankfurt a. M./Leipzig, 2001), S.12.
- 12) Hamann, a.a.O., S.387-93.
- 13) Ebd., S.446-50.
- 14) Ebd., S.337-435.
- 15) Ebd., S.169-86.
- 16) Ebd., S.129の表参照。同じページに書かれた説明によると、ウィーンを首都とするツイスレイターニエンでは、1910年頃、2850万人ほどの人口中、ドイツ系 (=日常的ドイツ語話者) は、ほぼ1000万人 (つまりようやく35%程度) であった。オーストリア=ハンガリー帝国は、オーストリア側のツイスレイターニエンと、ハンガリー側のトランスレイターニエンに分かれていた。
- 17) ハーマンは、このことについて、さまざまな事例を挙げ、またその背景も説明しているが、特にウィーンにおいてチェコ語で教育を行った私立学校をめぐる対立の事例 (ebd., S.450-6) が興味深い。この背景にあったのは、ウィーン市長ルエガーの取った、「ドイツ化」政策 (つまり、移民がウィーン市民になるための宣誓の儀式によって、ドイツ文化に同化させ、ドイツ語を話すように強制した) であった。
- 18) Brigitte Hamann, *Kronprinz Rudolf. Ein Leben*. (Wien 2005), S.9.
- 19) 「帝国の秩序をこの荒涼とした地方に及ぼさんがため、将校または官吏としてガリチアへと派遣された者は、追放されたかのように感じた。」(Pollack, a.a.O., S.9.)
- 20) „Lemberg war nach Wien, Budapest und Prag die viertgrößte Stadt der Habsburger Monarchie.“ (Sabine Fach/Bernd Schwenkros [Hg.], *Die Ukraine entdecken*, Trescher Reihe

Reisen, 7., überarbeitete Auflage [Berlin, 2003], S. 101.)

21) リヴィウ大学のホームページ (URL: <http://www.franko.lviv.ua/Geninf/index.htm>) に、大学の歴史についての詳しい記述がある。

22) リヴィウ国立オペラ・バレエ劇場公式ホームページに、建物の歴史について詳しく書かれている (<http://www.lvivopera.org/contents/history/facts/index.en.html>)。1897年から建設が開始され、1900年に完成した。

23) 中井和夫『ウクライナ語入門』第2版、大学書林、平成5年、p.4の「綴りと発音」の説明に従って、語末の *в* を [w] と発音されるものとする。強勢の置かれる母音は長音であるから、正確には、中井の表記のごとく「リヴィーウ」となるが、近年の新聞等では「リビウ」あるいは「リビフ」などと表記されることが多い。それゆえ、長音を無視して「リヴィウ」とする。以後、ウクライナ語の地名・人名表記はおおむね原音に忠実に、しかし長音は無視するという原則に (だいたい) 則るが、従来ロシア語風の表記が既に慣行となっているような人名の場合には、原音に近づけると却ってわかりづらいので、たとえば、「ドラホマーノウ」は「ドラホマノフ」とする。また、短音にすると奇妙に感じられる場合には、首尾一貫性が無いという謗りは免れがたいが、長音表記も採用した。因みに、「イヴァン・フランコ」を原音により忠実に音写すれば、「イヴァーン・フランコー」となる。

24) George G. Grabowicz, “Mythologizing Lviv/Lwów: Echoes of Presence and Absence” in John Czaplicka (ed.), *Lviv: a City in the Crosscurrents of Culture* (Cambridge, MA, 2005), p.317.

25) <http://en.wikipedia.org/wiki/Lviv>

26) Grabowicz, op. cit., p.314.

27) Ibid.

28) Paul Robert Magocsi, “Galicia: A European Land”, in *Galicia: A Multicultural Land*, ed. Christopher Hann and Paul Robert Magocsi (Toronto/Buffalo/London, 2005), p.15.

29) Grabowicz, op. cit., p.314.

30) 以上は、ibid., p.318-20の要約。

31) 黒川祐次『物語 ウクライナの歴史ーヨーロッパ最後の大国』中公新書 164、中央公論新社、2002年、pp.24-7。

32) 同上、pp.133-4。

33) 中山昭吉『近代ヨーロッパと東欧ーポーランド啓蒙の国際関係史研究ー』MINERVA 西洋史ライブラリー⑦、新装版、ミネルヴァ書房、1995年、p.384。

34) 同上、p.213。

35) 同上、p.337。

36) 英語版 Wikipedia 「Free City of Kraków」の項目記事を参照 ([http://en.wikipedia.org/wiki/Free\\_City\\_of\\_Krak%C3%B3w](http://en.wikipedia.org/wiki/Free_City_of_Krak%C3%B3w))。

37) 中山、前掲書、p.388。

38) 英語版 Wikipedia 「Free City of Kraków」(前掲 URL)。

39) 中山、前掲書、pp.384-5。

40) 同上、p.389。

41) Nikolas Wacyk, *Ivan Franko: His Thoughts and Struggles* (New York 1975), pp.58-9. また、Grabowicz, op. cit., p.316.

- 42) Ibid., p.64.
- 43) Magocsi, op. cit., pp.14-5.
- 44) Encyclopedia of Ukraine というウクライナについてのウェブ百科事典（現在のところ未完成のプロジェクト）に、プロスヴィータ（啓蒙）協会についての英語による非常に詳しい記事がある (<http://www.encyclopediaofukraine.com/pages¥P¥R¥Prosvita.htm>)。この段落の記述はそれを参照した。
- 45) 黒川、前掲書、p.143。同様に、ポーランド側にもウクライナ語の言語としての独自性を認めない発言が見られる (Grabowicz, op. cit., p.320)。
- 46) 同上、p.144。
- 47) 同上、pp.148-9。
- 48) Magocsi, op. cit., p.14. ガリチアはウクライナの独立運動家らによって「ウクライナのピエモンテ」と看做された。すなわち、イタリア統一において大きな役割を果たした小独立国ピエモンテに喩えられたのである。
- 49) Hamann, *Hitlers Wien*, a.a.O., S.128.
- 50) ハイコ・ハウマン『東方ユダヤ人の歴史』平田達治／荒島浩雅訳、鳥影社、1999年、p.260。
- 51) Hamann, *Hitlers Wien*, a.a.O., S.441.
- 52) 種村季弘『ザッヘル＝マゾッホの世界』平凡社ライブラリー518、平凡社、2004年、p.13。
- 53) 同上、p.39。
- 54) Kamil Tchorek, “Lviv: Galicia’s Moment” in *The Wall Street Journal (Online)*, December 2, 2004, Commentary (<http://online.wsj.com/article/0,,SB110194955779888834,00.html>).
- 55) 同上。
- 56) 種村、前掲書、p.42。
- 57) ドイツ人東方殖民に関するこの段落の歴史記述は、Hans Christian Heinz, „Geschichte der deutschen Siedlungen in Ostgalizien“, in Sabine Fach und Bernd Schwenkros (Hg.), a.a.O., S.173-96に依拠している。
- 58) Heinz, *ibid.*, S.173. さらに Jerzy Motylewicz によれば、この同化の事情には、宗教改革とそれに続く反宗教改革が関与していた (Jerzy Motylewicz, “Ethnic Communities of the Polish-Ukrainian Borderland”, in *Galicia: A Multicultural Land*, ed. Christopher Hann and Paul Robert Magocsi [Toronto/Buffalo/London, 2005], p.39)。
- 59) Wacyk, op. cit., p.1.
- 60) Magocsi, op. cit., p.10.
- 61) Ibid.
- 62) Ibid.
- 63) Ibid.
- 64) ハウマン、前掲書、pp.22-3。
- 65) Magocsi, a.a.O., p.11.
- 66) Suzan Wynne, *The Galitzianers, The Jews of Galicia, 1772-1918* (Kensington MD 2006).
- 67) Wikipedia ドイツ語版の「Jüdische Emanzipation」の項目の記事を参照 ([http://de.wikipedia.org/wiki/J%C3%BCdische\\_Emanzipation](http://de.wikipedia.org/wiki/J%C3%BCdische_Emanzipation))。
- 68) Ibid.

- 69) ハウマン、前掲書、pp.129-30.
- 70) <http://www.cats.ohiou.edu/~Chastain/ip/jewemanc.htm> にあるオハイオ大学のサイトを参照した。
- 71) Ibid.
- 72) ハウマン、前掲書、p.253。
- 73) 同上。
- 74) 同上。
- 75) 同上、p.252。
- 76) 同上、p.254およびp.257。
- 77) 同上、p.257。
- 78) 同上、p.258。
- 79) 同上、p.260。
- 80) The Ukrainian Weekly, June 8, 2003, No. 23, Vol. LXXI (<http://www.ukrweekly.com/Archive/2003/230305.shtml>)
- 81) 以下のアルメニア人に関する記述は、主として英語版 Wikipedia の「Armenian diaspora in Europe」に依拠している ([http://en.wikipedia.org/wiki/Armenian\\_diaspora\\_in\\_Europe](http://en.wikipedia.org/wiki/Armenian_diaspora_in_Europe))。
- 82) 『Microsoft エンカルタ総合大百科2003』の「アルメニア」の項目を参照。
- 83) ドイツ語版 Wikipedia の項目「Armenier in Europa」([http://de.wikipedia.org/wiki/Armenier\\_in\\_Europa](http://de.wikipedia.org/wiki/Armenier_in_Europa)) を参照した。
- 84) Ania Klijanienko, *Lemberg entdecken*, Trescher Reihe Reisen (Berlin, 2005), S.28.
- 85) 黒川、前掲書、p.55。
- 86) ウクライナ・ギリシャ・カトリック教会の場合は、ソ連時代にロシア正教会に強制的に「復帰」させられ、公的にはその存在を抹消されていたが、信者が密かに個人宅に巡回司祭を招いてミサを行うなど、非合法の地下教会として存続していた。ソ連崩壊後の現在、ウクライナ西部では、再びウクライナ・ギリシャ・カトリック教会が最も優勢な宗派として復活している。
- 87) Magocsi, op. cit., p.10.
- 88) The Ukrainian Weekly, June 8, 2003, No. 23, Vol. LXXI (<http://www.ukrweekly.com/Archive/2003/230305.shtml>)
- 89) Ibid.
- 90) Ibid.
- 91) “Austro-Hungarian Monarchy or Dual Monarchy”, in *Columbia Encyclopedia*, 3rd ed. (New York & London, 1963), p. 137.
- 92) Ibid.
- 93) Ibid.
- 94) 黒川、前掲書、p.188.
- 95) 同上、pp.201-2およびp.216。
- 96) <http://wien.orf.at/stories/44588/>
- 97) <http://members.aon.at/ukrchurch/deutsch/about.html> (ウクライナ語)
- 98) Wacyk, op. cit., p.IX.
- 99) 2004年2 - 3月、2005年9月と二度にわたって学生を引率してガリチアで研修旅行を実

施した折の、筆者の実見に基づいて書いている。シェフチェンコは必ずだが、フランコの肖像もしばしば国語の教室の壁に掛かっていたと記憶する。

100) 藤井悦子「シェフチェンコの生涯」(『シェフチェンコ詩選』所収、藤井悦子訳注、大学書林、平成5年) p.176。

101) 中井、前掲書、p.164。

102) 同上。

103) 同上。

104) Wacyk, op. cit., p.12.

105) Ibid., p.1.

106) Ibid., p.34.

107) Ibid., pp.25-6.

108) 'Ivan Franko' in "Encyclopedia of Ukraine" (<http://www.encyclopediaofukraine.com/display.asp?AddButton=pages¥F¥R¥FrankoIvan.htm>).

109) Ibid.

110) Ibid.

111) Hamann, *Hitlers Wien*, a.a.O., S.450-1. ここに書かれている、1867年基本法の19条の問題を参照。この条項を根拠として、その地域で25%を越える言語人口を占める言語は、「伝統的言語」とされ、種々の権利(その言語で学校教育を受ける権利も含まれる)が認められた。ウィーンおよびその周辺のニーダーエスターライヒ州でドイツ語のみを学校で使用される言語にするという法案 Lex Kolisko は、この条項と矛盾していたため、激しい論議を呼んだ。「スラブ化」と「ドイツ化」の張り合いは、結局、人口からみれば少数派であったガリチアのドイツ人には不利に働いたことを、ハーマンは指摘している。リヴィウではポーランド人が圧倒的に多数を占めていたので、教授陣もポーランド人が多数を占め、授業もほとんどポーランド語で行われていたようである。

112) リヴィウ大学ホームページ (<http://www.franko.lviv.ua/general/about.html>) の記述によると、戦間期に旧東ガリチア地方がポーランド領であった時代には、リヴィウ大学はヤン・カジミェシュ大学と呼ばれていた。大学の公式名にイヴァン・フランコの名を冠すことになったのは、ウクライナ・ソビエト社会主義共和国最高議会の1940年1月8日付けの制令による。

113) 黒川、前掲書、p.153。

114) ドイツ語版 Wikipedia の「Iwan Franko」の項目 ([http://de.wikipedia.org/wiki/Iwan\\_Franko](http://de.wikipedia.org/wiki/Iwan_Franko)) を参照。

115) 本文に記したのは、ドイツ語版 Wikipedia の「Iwan Franko」の項目に書かれているフランコの博士論文タイトル([http://de.wikipedia.org/wiki/Iwan\\_Franko](http://de.wikipedia.org/wiki/Iwan_Franko))。Wacyk の著書には誤字(誤植?)が多いのだが、そこに挙げられているフランコの博士論文のタイトルはやや違って、*「Der Roman vom Barlaam und Josaphat, sowie die darin enthaltende Parabel vom dem Einhorn (der Mann im Brunnen) und ihre slavische Bearbeitung」* となっている (Wacyk, op. cit. p.45)。

116) [http://de.wikipedia.org/wiki/Iwan\\_Franko](http://de.wikipedia.org/wiki/Iwan_Franko)

117) Ivan Franko, *zibrannya tvoriv u p'yatdesyaty tomakh*, tom 30, literaturno-krytychni pratsi (1895-1897), Akademiya Nauk Ukrainskoy SSR, Institut Literatury im. T.G.Shevchenko (Kyiv, 1981), S.500-521.

118) Ivan Franko, *zibrannya tvoriv u p'yatdesyaty tomakh*, tom 8, poetychni pereklady ta

perespivy, Akademiya Nauk Ukrainskoy SSR, Institut Literatury im. T.G.Shevchenko (Kyiv, 1977), S.7-65.

119) Ivan Denysyuk, “Fundamental’ne Doslidzhennya vahomoyi Problemy (zmist’ peredmovy)”, in Leonid Rudnyts’ky, *Ivan Franko i nimets’ka literatura* (L’viv, 2002), S.6. [イヴァン・デニシユーク「重要な問題の基礎的考察(序文の代わりに)」レオニード・ルドゥニツキー『イヴァン・フランコとドイツ文学』(リヴィウ、2002年)、p.6。]

「本書『イヴァン・フランコとドイツ文学』の著者、レオニード・ルドゥニツキー教授は、フランコの生涯と創作活動においてドイツ語がどのようなものであったか、そして彼がそれを既にドロホビツキー高校の卒業生としてどれほど見事に操っていたかを、きっちりと、用心深く確かめた。調律された音色と文体上のニュアンスとの豊かな音階を伴いながら、優美かつ高度に知的な文体で書かれたオリハ・ロシュケヴィッチ宛ての彼のドイツ語の手紙は、大学入学資格試験受験者の——並外れた学者の——秀逸な『卒業』論文として存在しているが、それはマーク・トウェインを自分の現実ならびに想像上の『恐怖』によってぞっとさせたその言語を完璧に自由自在に操っていた(おまけに、イヴァン・フランコは、マーク・トウェインの『ドイツ語の恐怖』という演説を翻訳し発表した)。いったいどのような効果的な方法あるいは超方法によって、非スラブ言語の習得において完璧さにまで到達することが可能だったのか、誰もがいまだにその秘訣を知りたがっている。」

120) Ibid., S.6-7. 「ギムナジウム時代のフランコは、二人のドイツ人生徒と友達になり、ドイツ語で『リンバッハの親父さん』と会話する機会を得た。これに付け加えてもよいだろうが、(ロマン・ホーラクの研究によれば) 当時ドロホビツキー校の上級クラスの生徒の大部分はユダヤ人だったので、おそらくドイツ語は、休憩時間や放課後にフランコの同級生たちが交わしていた言語でもあったと思われる。オーストリア帝国の国境内ではほとんど全てのインテリがドイツ語を知っていたし、彼らのうちの多くの者はウィーンで学んでいたのだから、ウクライナ人たちは自分たちの会話にドイツ語風の言い回しをたくさん差し挟んでいたが、それは、フランコの作品において登場人物の個性化のために描きこまれている。」

121) Leonid Rudnyts’ky, *Ivan Franko i nimets’ka literatura* [イヴァン・フランコとドイツ文学] (L’viv, 2002), S.87-121; S.131-135.

122) 英訳で絵本も出ている (Ivan Franko, *Fox Mykyta*, tr. by Bohdan Melnyk [Montreal/Plattsburgh, NY, 1978])。その本の最後に出ている著者紹介によれば、『狐ミキータ』(1890)は、「彼の全作品の中で最も長く愛読されている (the most lasting in popularity of all his works)」という。

123) Bohdan Melnyk, “From the Translator”, in Ivan Franko, *Fox Mykyta*, tr. by Bohdan Melnyk (Montreal/Plattsburgh, NY, 1978), p.7.

“But who are they, these beasts, indeed?

The answer is not hard to find.

Just keep the following in mind:

Behind each beast, whate’er its race,

There always hides a human face.

It is, therefore, a human tale

Wrapped in an allegoric veil.”

124) 特に、第7章の狼の独白 (ibid., p.77-86)。



125) 第4章の冒頭では、狐ミキータが子どもたちに生きる知恵を教えている (ibid., p.43)。

“Proud and happy, Fox taught them the secrets of life;  
he told them what to do and what to avoid to survive  
in this beautiful cruel world.”

126) Ivan Denysyuk, op. cit., p. 5. 「自己開発のために、民族文学は民族の伝統の保持に際して、新鮮な影響の吸入を必要とする。芸術的創造において民族的なものは、輸入されたもの、借入されたもの、あるいは移動の勢いに乗って渡来したものに優る。諸民族の協調のための橋である翻訳についてのフランコの隠喩は有名である。しかし、フランコがそのような橋の建設を兩岸の主権を強化するものとして予見したことは、しばしば忘れられてきた。」

127) Rudnyts'ky, op. cit., p.135. 「フランコの『狐ミキータ』は翻訳ではなく独自の作品ではあるが、ゲーテやその他のドイツの源泉を参照している。」